



第46回 九州ブロック 母子生活支援施設研究大会を 鹿児島市で開催

九州各県の母子生活支援施設に従事している役職員および行政関係者など約80人の参加のもと、9月8日・9日の2日間にわたり鹿児島市内の会場で開催されました。

今回は「傷ついた心 癒そうオアシスで」というテーマのもと、基調講演、シンポジウムならびに記念講演の内容で熱心な研究討議が行われました。

1日目は開会式典の後、全国母子生活支援施設協議会の大塩孝江会長（鳥取県「倉明園」施設長、写真左上）から、7月に厚生労働省から発出された「社会的養護の課題と将来像」を踏まえ（1）施設が発揮すべき役割（2）危機管理対策の徹底（3）最低基準をめぐる動向など施設の現状と課題等について基調講演がありました。



引き続き、「傷ついている母と子に施設や社会でできることは」をテーマに、鹿児島大学医学部保健学科助教の日隈利香氏をコーディネーターにして、シンポジウムが行われました。

近年、母子生活支援施設では、DV被害者・被虐待児童・障害を抱えた母と子など、専門的なケアを必要とする利用者が増えている現状を踏まえ、パネリスト3人による発表がありました。

一人目は医療関係の立場から、鹿児島大学医学部保健学科准教授の下敷領須美子氏が、現在活動しているDV（ドメスティックバイオレンス）予防教育について発表されました。



二人目は施設現場の立場から、九社連及び福岡県母協会長で全国副会長の渡辺英秋氏が重篤な課題を抱えた母子家庭の事例を通じて、施設機能の役割や職員に期待することなどを発表されました。

三人目も施設現場の立場から、熊本県母協会長の嶋村聖子氏がDV・児童虐待を理解するとともに、未然防止教育と啓発活動の紹介、施設での支援について発表されました。

会場からも熱心に取り組んでいる事例紹介や質疑応答があり、傷ついた母と子が人間らしさを取り戻し、



のびのびと生きられるように、施設機能や社会的仕組みによる支援の役割を再確認しました。

2日目は鹿児島県陶業協同組合理事長の西郷隆文氏から「曾祖父・隆盛公の志に学ぶ」というテーマで記念講演がありました。

明治維新の原動力となった人材を育てた薩摩藩の「郷中教育」を見直し、後生に引き継ぐのがご自身の志でもあるという西郷氏から西南戦争に至るまでの隆盛公の興味深い話を聞くことができました。

